

## 論文要旨

幼稚園でのフィールドワークを通じた対人葛藤の保育実践的意味の研究  
—倉橋惣三の保育思想とネル・ノディングズのケアリング論を視点として—

水津 幸恵

### 問題と目的 (第1章)

幼稚園、保育所、認定こども園等の就学前施設において、多くの子どもは初めて複数の同年齢他者と出会い、共に過ごす。園生活の中では、共にかかわり合って過ごすことの喜びを感じる出来事とともに、共にかかわり合うからこそぶつかり合い、葛藤する出来事も起こってくる。この対人葛藤(いざこざ、けんか、トラブル)は、他者に危害を加えたり傷つけたりする攻撃性(aggression)とは区別され、発達を刺激する重要な事象として位置づけられてきた(Shantz 1987: 283-5)。特にピアジェ(Jean Piaget, 1896-1980)においては、幼児間の対人葛藤をはじめとする相互交渉は、他者視点取得による道徳判断の発達の機会とされ(Piaget 1932=1977)、わが国の幼児教育・保育においても「道徳性の芽生え」を培うに当たって、対人葛藤は重要な経験とされている。そして、幼児期の対人葛藤は、他者感情推測(中川・山崎 2005)や他者視点取得(芝崎・山崎 2013)、「心の理論」(鈴木・子安・安 2004)の発達との関連が検討されてきた。しかしながら、近年、このような認知的な他者感情推測の発達段階に対しては批判もなされている(Broke 1978; Onishi & Baillargeon 2005)。また、保育実践の場で対人葛藤をとらえた研究からは、必ずしも双方の意図をすり合わせて葛藤や問題を解決するわけではなく、ぶつかり合いやすれちがいの抱き込みながら他者とかがわり合い続けているという子どもの生活の実際がとらえられ(e.g., 広瀬 2006; 掘越・無藤 2000; 松原 2017)、保育者による実践研究では、子どもの生活全体を支えるまなざしから、対人葛藤は園生活の中での多様な出来事の一つとして位置づけられていた(e.g., 入江 1999; 村田・友定 1998; 利根川 2013; 岡村・金田 2002)。以上をふまえて本研究では、その子どもの生活そのものを支えようとする保育実践的なまなざしから、対人葛藤の発達の意義とは異なる保育実践的意味を見出すことを目的として、幼稚園でのフィールドワークを行うこととした。

### 理論的枠組 (第2章～第4章)

本研究では、理論的枠組として倉橋惣三の保育思想とネル・ノディングズのケアリング論に着目した。まず、倉橋の保育思想においては、対人葛藤は道徳性と結びつけられておらず、自分を生きさせてゆく自然のはたらきを源とする「自発性」の表れとして位置づけられていたことが明らかとなった(倉橋 1931; 1949)。そして倉橋は、道徳観念や原則を教授する道徳教育を批判し、幼児期においては、他者を人間として感じ、共感的にかかわり合って生きるという「人間性」が涵養されること、つまり日々の生活の中で他者を大切にしようとする情感が自然に沸き起こってくることを重視していた。この倉橋の

道徳教育に対するスタンスは、ピアジェやコールバーグにおける道徳判断の発達段階理論に相對してノディングズが提起した、愛や心の自然な傾向から「個別具体的な他者」の訴えを共感的に探求してそれに応えるという日々の生活での応答的な關係に人間の道徳性を見出すケアリング論と相通するものであることが見出された。この人間觀の共通性から、倉橋とノディングズはともに道徳性と対人葛藤を結びつけていないということが明らかになった。以上の倉橋とノディングズの議論を理論的枠組とし、本研究では、対人葛藤を「自発性」の現れとしてとらえ、「人間性」の涵養とケアリング關係の構築という視点から対人葛藤を含む日々の生活における子ども同士のかかわり合い全体をとらえていくこととした。

### 結果と考察（第5章～第8章）

以上の理論的枠組に依拠し、幼稚園4歳児クラスにおける縦断的なフィールドワークを行った。その結果、1学期の關係の始まりの時期において、対人葛藤は、他者との出会いにおいて自己のありようが模索される最中において起こってきたものととらえられた。それゆえ、保育者がまず大切にしていたのは、それぞれの子どものさまざまな在り方を受けとめる人間理解的なまなざしで人とかかわり合うケアリング關係が築かれること、そして子ども自身が「自発性」を發揮して生活を作っていくことであった。2～3学期の關係の深まりの時期では、対人葛藤を抱えもちながら生活を送るありようとして、葛藤状況から一旦距離を取って自分のしたい遊びに取り組む姿がとらえられ、遊びに取り組むことが「自発性」を發揮し主体的に自分の生活を作り出すこと、そしてさまざまな人と共に遊ぶ關係を結ぶことに通じていることが示唆された。以上のことから、次の3点が見出された。第1に、「自発性」の現れとしての対人葛藤の具体的な様相として、対人葛藤は、他者との關係の中での自己のありようが探求される中で起こってきたものととらえられた。第2に、そうしてぶつかり合いながらケアリング關係を築いていくことは、道徳的な原則やルールに従ったり、頭の中で複雑な思考を行ったりするというよりも、対人葛藤における複雑な状況に身を置いて生活を進める中で、相手の気持ちを感じながらかかわり続けることによってなされていることが見出された。第3に、対人葛藤を抱えもちながら共に過ごしていく上では、遊びに取り組む中で「自発性」を發揮して主体的に自分の生活を作り出すとともに、それを通して他者とのさまざまな關係の在り方へとひらかれることが見出された。

### 結論と今後の課題（第9章）

以上の結果から、対人葛藤の保育実践的意味、つまり、子どもが生活の中で他者とぶつかり合うということそのものの意味として、ぶつかることを通して自発的に生きる人間として互いの存在を感じ合い、主体的に生活を進める上でさまざまな關係の在り方へとひらかれる契機となるという、他者と共にある場において自己のありようを探るプロセスにおける意味が見出された。本研究の結果を土台とし、あらゆる発達のプロセスやさまざまな文脈における対人葛藤の意味を検討していくことを、今後の課題とする。